

「学生生活実態調査」(2006年・2010年)にみられる本学学生の特徴

—私大連全体との比較の中で—

齋藤 誠

はじめに

本報告は、社団法人日本私立大学連盟（以下「私大連」）が4年に一度、本学を含めた加盟大学の学生を対象に実施している「学生生活実態調査」の結果に基づき、本学学生の特徴を捉えようとするものである。使うデータは、2010年10月に実施された調査結果について本学学生部がまとめた報告書『第20回学生生活実態調査報告書』（2011年7月）と、その4年前の2006年10月に実施された調査報告書『第18回学生生活実態調査報告書』（2007年7月）に掲載されたものである。

これらの報告書には、全質問の選択肢ごとに私大連全体における回答率と本学における回答率が掲載されている。私大連全体のデータは、私大連に加盟する全大学の学部学生から1%を抽出して行った調査の結果であり、私大連学生委員会『学生生活実態調査集計報告書』に詳しくまとめられている。それによると、2006年調査では123大学9,767名のうち6,639名（回収率68.0%）から、2010年調査では122大学10,268名のうち7,117名（回収率69.3%）から回答を得ている。調査サンプルの抽出方法や調査の具体的実施方法は記載されていない。

他方、本学のデータであるが、これは私大連調査を実施するさい、私大連全体との比較を可能にするため、私大連調査の対象者に含めて、本学学生の10%を対象に本学が実施した調査の結果である。したがって、本学回答者のうち約1割は、私大連調査の回答者と重なっている。しかし、私大連全体と本学の調査結果は、ほぼ独立したサンプルによると考えてよい。本学回答者は2006年が1,120名（回収率82.8%）、2010年は1,159名（回収率92.7%）である。本学の調査サンプルは各学部学科在籍学生の10%の無作為抽出となっているが、現実には特定の授業の履修学生を利用するなど、必ずしも厳格なものではないという。

しかし、本報告で使うデータは単純集計結果のみであり、分析も私大連全体と本学の回答率の差が大きい項目をみながら、本学学生の特徴をみてとろうというものである。もとななる調査の厳密性が多少欠けていることは、さほど大きな問題にはならないと考える。

また、本学は、私大連調査の中間年（最近では2008年）に私大連調査とほぼ同じ質問項目で独自の調査を行い、その結果を『第19回学生生活実態調査報告書』（2009年7月）報告書として出している。しかし、そこでは、私大連全体のデータがないため本学との比較はできない。今回使用する報告書に第19回が含まれていないのは、そのためである。

1. 学生生活の充実を感じていない学生

学生生活に関する総括的質問「あなたの学生生活は充実していますか。」への回答において、本学学生の回答結果は私大連全体とかなり異なる。表1からわかるように、本学学生では「充実している」と回答する比率が、2006年、2010年とも私大連全体より12ポイント以上低い。「まあ充実している」と合わせた比率では、2006年では12ポイント、2010年では15ポイント以上低い。その分、「普通である」の回答率が私大連全体より高く、「あまり充実して」と「充実していない」もやや高い。本学では、学生生活が充実していると感じていない学生が多いということになる。

ちなみに、本学学生では、学生生活を充実していると感じている者は男性より女性に多い。「充実している」と「まあ充実している」を合計した比率でみると、2006年には女性が67.1%に対して男性は56.9%、2010年には女性が65.5%に対して男性は53.4%と、10～12ポイント女性のほうが高い。もっとも、同様の傾向は私大連全体でもみられ、2006年でも2010年でも、「充実している」と「まあ充実している」の合計比率は、男性より女性のほうが約9ポイント高い。

表1 「あなたの学生生活は充実していますか」 (単位%)

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
充実している	30.3	16.9	31.0	18.2
まあ充実している	42.4	43.7	42.3	39.4
普通である	19.6	26.1	19.2	29.1
あまり充実していない	5.2	9.1	4.7	8.5
充実していない	1.9	3.7	1.8	4.1
N.A.	0.6	0.6	0.9	0.7

それではなぜ、本学には学生生活が充実していないと感じる学生が多いのか。以下では、その原因を探っていくことにする。

さしあたりのヒントとなりそうなのが、「大学に入ってよかったと思うのは、どういう点ですか。3つまで選んでください。」という質問への回答である。その結果をまとめた表2をみると、本学学生の回答は、「友人を得たこと」「知識や技術が身についたこと」「クラブ・サークル活動」の順に多い点で、基本的には私大連全体と同じである。しかし、各選択肢の回答比率を私大連全体と比較すると、本学学生は「本を読む機会が増えたこと」「アルバイトができたこと」「遊べる時間が持てたこと」の3つで回答率が高く、「友人を得たこと」「先生と親し

くなれたこと」「クラブ・サークル活動」「大学祭などの行事・ボランティア」の4つで回答率が低い。後者の4つと比べると前3者は大学生活に直結したのではなく、充実した大学生活を実感させる効果は弱いと考えられる。この結果は、以下の分析にとって示唆を与えるものである。

表2 「大学に入ってよかったと思う点」(3つまで選択) (単位%)

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
知識や技術が身についたこと	58.7	52.9	59.8	60.1
本を読む機会が増えたこと	15.4	20.6	12.4	16.4
友人を得たこと	73.3	66.1	73.7	66.6
先生と親しくなれたこと	8.5	5.0	9.0	4.5
趣味やスポーツを楽しめること (クラブ・サークル活動)	39.6	31.0	39.6	32.4
他人と協力して何かを達成できたこと(大学祭などの行事運営・ボランティア活動)	20.8	13.3	22.9	14.0
アルバイトができたこと	16.5	24.5	16.1	24.1
遊べる時間が持てたこと	21.7	29.8	21.4	28.6
N.A.	1.0	1.9	0.9	0.9

2. 短いキャンパス滞在時間

本学学生の学生生活における充実感の弱さと深く関係していると思われるのが、「あなたの平均的な1日あたりの<キャンパス滞在時間>」への回答である。これによると、本学学生のキャンパス滞在時間は、私大連全体より目立って短い。

表3をみると、キャンパス滞在時間が4時間以内の学生は、私大連全体では2006年22.1%、2010年19.4%と20%前後にとどまっているのに対して、本学では2006年35.5%、2010年32.7%と学生のほぼ3分の1に及ぶ。反対に、キャンパス滞在時間が6時間を超える学生は、私大連全体では2006年に42.8%、2010年には47.7%と4割を超え、しかも4年間で増加傾向にあるのに対して、本学ではそれぞれ29.3%、30.0%に留まっている。

報告書には回答をもとに計算した「概算平均」滞在時間が計算されているが、それによると私大連全体では学生のキャンパス平均滞在時間は2006年で6.35時間、2010年で6.60時間なのに対して、本学学生は2006年5.43時間、2010年5.48時間であり、2006年で約55分、2010年で約67

分滞在時間が短い。

ちなみに、キャンパス滞在時間は学年による差が大きく、1年生の滞在時間が長く、4年生の滞在時間が少ない。2年生と3年生を比較すると、2年生の滞在時間は1年生とほぼ同じであるが、3年生になると滞在時間が少なくなる。この傾向は私大連全体でもみられるが、2年生から3年生にかけての減り方、3年生から4年生にかけての減り方は、ともに私大連全体より本学のほうが大きい。また、学部別にみると、2回の調査とも文学部と経済学部学生の滞在時間が少なく、工学部学生の滞在時間が長い。こうした結果を総合すると、本学の場合、土樋キャンパスの学生の滞在時間が特に短いということになる。

表3 「あなたの平均的な1日あたりの<キャンパス滞在時間>」 (単位%)

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
なし	0.7	0.5	0.4	0.3
～1時間	1.0	1.3	0.9	1.7
～2時間	3.2	6.2	2.6	5.2
～4時間	17.2	27.5	15.5	25.5
～6時間	29.1	30.4	28.9	33.8
～8時間	24.4	18.8	26.1	20.3
～10時間	11.4	7.3	13.5	6.6
10時間超	7.0	3.2	8.1	3.1
N.A.	6.0	4.8	4.0	3.5

3. 課外活動に対する消極的な姿勢

本学学生のキャンパス滞在時間の短さは、何によるのであろうか。最も大きな原因は、課外活動(クラブ、サークル活動、ボランティアなど)が活発でないことにある。そのことは、すでに表2でみたように、「クラブ・サークル活動」「大学祭などの行事・ボランティア」から大学生としての充実感を感じているとの回答が私大連全体より7～8ポイント少ないことからもうかがわれる。

さらに明確なデータは、「あなたの平均的な1日あたりの<課外活動(クラブ、サークル活動、ボランティア)時間>」の回答にみることができる。その結果を示した表4によると、課外活動時間が「なし」の比率が、2006年には私大連全体で53.2%に対して本学では70.3%、2010年には私大連全体が41.9%なのに対して本学では61.3%と大きく上回っている。しかも、

その割合は2006年から2010年にかけてかなり減少しているが、減少幅は私大連全体より本学のほうが小さく、結果として比率の差は拡大している。

表4 「あなたの平均的な1日あたりの<課外活動時間>」 (単位%)

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
なし	53.2	70.3	41.9	61.3
～1時間	12.6	9.1	18.2	13.6
～2時間	12.7	6.5	17.5	11.8
～4時間	10.7	4.0	14.0	7.3
～6時間	2.9	1.4	3.5	1.5
～8時間	0.8	0.4	0.9	0.3
～10時間	0.4	0.2	0.4	0.0
10時間超	0.3	0.0	0.5	0.1
N.A.	6.6	8.0	3.1	4.1

本学において課外活動は活発でないことは、「課外活動(クラブ、サークル活動、ボランティア)に参加していますか。1つだけ選んでください。」の回答にもあられている。表5によると、課外活動に「積極的に参加している」学生の比率は、2006年には私大連全体が46.5%に対して本学は30.1%、2010年には私大連全体が49.5%に対して本学33.8%と、私大連全体より15～16ポイント低い。反対に「最初から参加していない」の比率は、2006年には38.0%、2010年には27.0%と私大連全体より、2006年には15ポイント、2010年には8ポイント高い。また、2006年から2010年にかけて、「最初から参加していない」の比率は大きく低下するが、「積極的に参加している」はそれほど増えておらず、「参加しているが熱心ではない」のほうが増えている。

表5 「課外活動に参加していますか」 (単位%)

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
積極的に参加している	46.5	30.1	49.5	33.8
参加しているが熱心ではない	12.5	10.3	14.6	14.5
参加しているが活動していない	4.6	5.3	5.4	8.4
参加していたがやめた	13.1	15.8	10.7	15.8
最初から参加していない	22.7	38.0	19.3	27.0
N.A.	0.6	0.5	0.5	0.5

それでは、なぜ本学学生は課外活動に消極的なのであろうか。表6は、課外活動に参加していない学生、参加していたがやめた学生に「その理由を2つまで選んでください。」ときいた結果である。それみると、理由はさまざまである。しかし、2006年、2010年ともに私大連全体より高い回答率を示しているのは、「入りたいクラブがない」「興味関心がない」「何となく」の3つである。特に、「興味関心がない」は2010年、「何となく」は2006年において私大連全体より本学で目立って高い。本学学生は、課外活動に参加しない理由においても、消極的な回答、あいまいな回答が多い傾向がみてとれる。そもそも大学における課外活動の意義について、それほど強く意識していないのかもしれない。

ところで、本学学生は、「大学の施設・サービスに対する期待や要望にはどのようなものがありますか。3つまで選んでください。」という質問に対して、「学生会館・サークルルームなどの充実」や「学生食堂の充実」を挙げる比率が、私大連全体と比較すると目立って低い。「学生会館・サークルルームなどの充実」については、私大連全体では2006年21.9%、2010年20.2%なのに対して、本学では11.2%、13.1%、「学生食堂の充実」については、私大連全体では2006年44.0%、2010年43.2%なのに対して、本学では33.6%、34.3%である。しかし、これまで見てきたことをふまえると、この数字は、本学施設が十分に整備されているために不満が少ないというよりは、本学学生は大学キャンパスに滞在する時間が短く、課外活動に消極であるために、施設の現状を不満の対象として十分に意識化していないことを示していると考えべきであろう。

表6 「課外活動に<参加していたがやめた>または<最初から参加していない>理由」
(2つまで選択) (単位%)

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
遠距離通学	18.0	14.9	17.5	12.5
勉強と両立できない	21.5	19.1	21.9	17.3
アルバイトと両立できない	23.6	24.2	24.3	25.6
入りたいクラブがない	22.4	25.5	20.3	23.4
集団生活に拘束されたくない	10.2	9.6	8.8	7.1
人間関係のトラブル	5.8	6.0	5.2	4.8
興味・関心がない	13.5	14.9	12.8	18.8
費用がかかり過ぎる	14.2	11.1	17.3	17.1
健康上の理由	2.2	1.7	2.1	2.0
学外の講座や各種学校などで時間がない	2.8	1.8	3.2	1.6
学内の講座で時間がない	7.1	4.5	6.7	4.4
何となく	12.5	20.1	12.2	15.5
その他	13.2	12.1	11.1	10.3
N.A.	2.4	3.0	3.4	3.8

4. 勉学での関心はもっぱら単位取得

課外活動に消極的な本学学生にとって、学生生活の中心は授業を中心とする正課学習ということになる。そのことは、「あなたの学生生活において、正課教育と課外活動（クラブ、サークル活動、ボランティア）はどのような意味をもっていますか」という質問への回答に表れている。「正課教育が学生生活の主要部分を占める」との回答が、2006年には私大連全体が42.0%に対して本学は50.4%、2010年には私大連全体が40.1%に対して本学は48.6%と、ともに8ポイント以上高い。

しかし、このことは、本学学生が大学での勉学に興味・関心をもって学生生活を送っていることを意味しているかといえ、そうではない。「現在、あなたが興味や関心を持っていること、または行っていることは次のどれですか。2つまで選んでください。」への回答をみると、「大学の勉強」を挙げる比率は、2006年には本学16.9%に対して私大連全体は21.5%、2010年には本学19.3%に対して私大連全体では22.9%と、本学のほうがはっきりと低い。本学学生にとって、大学での勉学は学生生活の中心ではあるが、興味・関心の中心ではない。

また、本学学生は、大学での勉学に関わる施設・設備利用時間も私大連全体に比べて短い。「あなたの平均的な1日あたりの<図書館・コンピュータ室等時間>」について、本学学生は2006年39.9%、2010年40.5%と約4割の学生が「なし」と答えているが、この比率は、私大連全体の31.9%、33.9%よりかなり高い。

表7 「科目を登録する時に重視する要因」（3つまで選択）（単位%）

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
教養が身につく	25.4	25.9	26.3	27.7
専門的な知識が身につく	35.8	35.4	36.2	34.0
視野が広がる	20.9	20.1	22.9	19.9
知的刺激がある	27.8	18.7	25.7	20.8
資格取得に役立つ	13.9	15.7	14.9	12.3
就職に役立つ	6.8	10.1	8.5	10.8
時代のニーズに合う	3.1	3.4	2.5	2.9
教師の人間性	13.4	10.0	13.1	10.4
面白く楽しい授業	32.7	30.5	35.1	33.0
出欠チェックがない	5.3	4.1	4.2	3.9
単位認定が緩やか	24.7	26.2	24.2	28.3
友達が登録するから	5.3	5.8	5.3	4.7
講義の時間帯	36.5	40.3	34.2	39.1
卒業単位数を満たすため	24.2	32.1	22.9	31.1
大学からの選択指示	7.4	5.6	6.8	5.4
その他	2.0	2.0	1.9	1.6
N.A.	0.8	0.5	0.5	0.4

さらに、本学学生は、大学の勉学にお金をかけていない。「授業期間中におけるあなたの1ヶ月の<教科書等を含む学習資料費>」に対して、「なし」とする回答率は、私大連全体では2006年24.6%、2010年24.4%なのに対して、本学学生では34.6%、34.3%であり、約10ポイント高い。その一因が本学学生は全体として経済的に豊かでないことに求められることは確かであるが、それだけでは説明できない。

表8 「講義について希望すること」(3つまで選択) (単位%)

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
板書やプレゼンテーションを工夫してほしい	45.2	51.3	45.8	50.0
資料や参考書などを提示してほしい	10.4	12.1	12.1	11.2
教科書を決めてほしい	6.6	8.2	5.7	9.1
シラバスの内容と合致する授業をしてほしい	12.1	15.4	11.6	9.3
ノート講義の場合、レジュメを配付してほしい	24.6	21.9	28.5	26.0
小テストなどで理解度を把握しながら講義を進めてほしい	9.3	8.2	9.9	8.8
ビデオなどの視聴覚教材を活用してほしい	18.2	13.5	16.6	14.8
演習あるいは実験の時間数を増やしてほしい	8.8	7.3	8.8	5.3
社会問題や身近な事例を扱った授業を増やしてほしい	27.0	22.4	24.5	25.3
地域や学外の社会人による講義を増やしてほしい	11.3	9.9	9.5	8.9
出欠のチェックをしないでほしい	10.6	9.4	10.6	11.2
単位認定を緩やかにしてほしい	26.3	35.6	24.4	33.4
学生に対して厳しく、熱意のある講義をしてほしい	12.7	9.9	12.8	9.1
私語にはきちんと注意してほしい	21.1	21.8	21.4	21.7
休講をなくしてほしい	3.6	1.9	4.5	1.5
その他	6.0	6.1	5.5	6.0
N.A.	0.8	1.4	0.8	0.6

では、本学学生は、大学の勉学にはどのような意識をもって臨んでいるのであろうか。

それを探る手がかりとなるのが、「科目を登録する時に、重視する要因は何ですか。3つまで選んでください。」への回答である。その結果をまとめた表7によると、2006年、2010年とも本学学生が私大連全体より多く挙げているのは、「就職に役立つ」「単位認定が緩やか」「講義の時間帯」「卒業単位数を満たすために」の4つであり、逆に少ないのは「知的刺激がある」「教師の人間性」「面白く楽しい授業」の3つである。ここからは、本学学生が授業そのものの魅力によってではなく、卒業のための単位の効率的取得といった観点から履修登録を行っている傾向がみとれる。

また、「講義について希望することは何ですか。3つまで選んでください。」への回答も参考になる。結果をまとめた表8をみると、2006年、2010年ともに「板書やプレゼンテーションを工夫してほしい」が最も多いことは、私大連、本学とも同じである。しかし、本学ではその次に「単位認定を緩やかにしてほしい」の比率が多く、2006年には35.6%、2010年には33.4%と、私大連全体より9ポイント以上高い回答率を示している。ここでも本学学生にとって、単位認定が授業の関心事であることがわかる。

このように、本学には、大学での勉学をもっぱら進級・卒業するための単位修得という観点から捉えている学生が多い。同様の結果は、他の質問への回答にも表れている。「大学生活の中で大切だと思っていることは何ですか。3つまで選んでください。」との質問では、「進級・卒業すること」という回答をする学生が本学には多い。私大連全体では2006年21.0%、2010年22.5%だったのに対して、本学では28.7%、29.2%とほぼ7ポイント高い。また、「大学進学目的は何ですか。3つまで選んでください。」という質問への回答では、「大学卒の学歴が必要と思ったから」を選んだ比率が、私大連全体では2006年50.2%、2010年56.6%なのに対して、本学では57.1%、64.5%と7～8ポイント高い。上述のように「勉強に余計な時間はかけない」「余計なお金をかけない」という本学学生の行動の背景には、こうした意識があると考えられる。

5. 多い長時間アルバイト

1の表2で示したように、本学学生は、大学に入ってよかったと思う点として「アルバイトができたこと」と回答する比率が、2006年、2010年とも私大連全体より約8ポイント高い。また、「現在、あなたが興味や関心を持っていること、または行っていることは次のうちどれですか。2つまで選んでください。」への回答でも、本学学生は「アルバイト」を挙げる比率が2006年15.0%、2010年16.5%と、私大連全体の12.4%、11.2%よりやや高い。本学学生においては、アルバイトが重要な位置を占めている学生が多い。

しかし、私大連全体と比べてアルバイトをしている学生が本学では多いのかといえば、必ずしもそうではない。表9はアルバイトを含めた就労についての質問の結果であるが、これをみると、私大連全体と比べて、アルバイトをしている学生はむしろ少ないことがわかる。本学では、「常時している」と「時々している」を合わせた比率は、2006年で63.2%、2010年で60.2%と、ともに私大連全体より6ポイント以上低い。本学に多いのは「これからしようと思っている」という回答である。

表9 「就労(アルバイト)について」 (単位%)

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
常時している	42.4	40.4	38.9	34.8
時々している	27.0	22.8	27.8	25.4
定職を持っている	2.1	2.1	2.6	2.2
これからしようと思っている	18.7	24.3	22.0	28.6
したことがなく、これからもしようと思わない	5.9	6.6	5.5	6.5
N.A.	3.9	3.9	3.2	2.6

他方、アルバイトを含めて就労している学生を対象に「1ヶ月平均何時間していますか」ときいた質問の回答をまとめてみると、本学学生には長時間にわたって就労している学生が多いことがわかる。表10をみると、1ヶ月61時間以上の就労をしている比率が、私大連全体では2006年36.3%、2010年30.2%なのに対して、本学学生では47.0%、38.5%と、2006年で約10ポイント、2010年で約8ポイント高い。

表10 (アルバイトをしている人に)「1ヶ月平均何時間していますか」 (単位%)

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
～20時間	16.9	15.8	20.0	17.7
21～40時間	19.9	11.8	21.1	17.3
41～60時間	23.6	21.1	25.7	21.9
61～80時間	18.6	22.5	17.5	22.0
81～100時間	11.5	17.0	9.2	12.6
101～120時間	3.3	4.5	1.9	1.8
121時間～	2.9	3.0	1.6	2.1
N.A.	3.4	4.4	2.9	4.6

もっとも、上の表9でみたように、就労している学生の比率自体は本学のほうが私大連全体より少ない。そこで、分母を就労者ではなく全学生にして計算し直すと、1ヶ月61時間以上の就労者の割合は、私大連全体では2006年25.9%、2010年20.9%なのに対して、本学では30.7%、24.0%となり、やはり本学学生には長時間就労者が多いことがわかる。つまり、私大連全体と

比較すると、本学には、一方ではアルバイトをしていない学生が多く、他方では長時間のアルバイトをしている学生が多いということになる。

ちなみに、アルバイト経験者に「アルバイトをする動機・理由は何ですか。2つまで選んでください。」ときいた質問への回答をみると、「ほしい物を購入したり、遊び、旅行、趣味などにあてる」が最も多く、ついで「主に生活費、学費などにあてる」と「社会勉強」が続くが、その比率は本学と私大連全体との間でほとんど変わらない。つまり、本学学生は、アルバイトに他大学の学生とは違う何か特別の意味を見出しているわけではなさそうである。本学学生にみられる「アルバイトができてよかった」とか「アルバイトに興味や関心がある」という意識は、むしろ、大学生活でそれ以外の活動への関わりや関心が弱いことによる、副次的な効果・影響であると考えてよいだろう。

6. 自由時間はスポーツ、インターネット？

1の表2で示したように、本学学生は、大学に入ってよかったと思う点として、上記の「アルバイトができた」となると、「遊べる時間がもてた」をあげる比率が私大連全体より7～8ポイント高い。ちなみに、「遊べる時間がもてた」ことをよかったと感じているのは女性より男性であり、2006年は女性24.2%に対して男性33.0%、2010年には女性24.9%に対して男性30.7%である。

それでは「遊べる時間」とは具体的にはどんな時間なのであろうか。もっとも、ここにいう「遊べる時間」は、やや広く「自由な時間」や「余暇」と解釈しておいたほうがよいのかもしれない。

その手がかりを「現在、あなたが興味や関心を持っていること、または行っていることは次のうちどれですか。2つまで選んでください。」への回答から探してみたい。表11をみると、自由な時間を利用するものとして、「スポーツ」「旅行」「美容・健康・ファッション」「車・オートバイ」「パソコン・インターネット」「音楽・美術・演劇」「読書」「友人との交遊」といった選択肢があるが、本学学生が私大連全体より多く挙げているのは「スポーツ」「車・オートバイ」「パソコン・インターネット」「読書」である。「読書」については、「大学に入ってよかったと思う点」(表2)の選択肢としてあり、本学学生は、私大連全体よりこの選択を多く選んでいる。したがって、本学学生のいう「遊べる時間」とは、「スポーツ」「車・オートバイ」「パソコン・インターネット」などに費やす時間を考えればよいのかもしれない。ちなみに、これら3つは、いずれも女性より男性に多い回答である。

表11 「現在、興味・関心を持っていること、行っていること」(2つまで選択) (単位%)

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
大学の勉強	21.5	16.9	22.9	19.3
資格の勉強	20.7	22.6	20.4	23.4
クラブ・サークル活動	22.1	11.8	21.9	14.5
留学	6.1	4.3	6.6	3.3
ボランティア活動	2.7	2.2	3.5	3.0
アルバイト	12.4	15.0	11.2	16.5
自治会活動	0.5	0.1	0.7	0.1
宗教活動	1.0	0.9	1.0	0.9
スポーツ	11.6	14.2	9.4	11.3
旅行	9.4	6.8	8.8	7.9
美容・健康・ファッション	11.0	9.9	8.4	8.4
車・オートバイ	6.2	10.2	4.8	5.5
パソコン・インターネット	7.4	10.9	6.3	10.1
音楽・美術・演劇	9.7	9.5	10.0	8.4
読書	8.1	10.7	7.1	9.2
大学院進学	3.9	2.9	3.6	2.4
就職活動	13.2	14.6	15.8	17.8
友人との交際	13.8	14.6	13.7	12.3
起業	1.2	1.4	1.2	0.9
その他	4.0	4.3	4.1	4.3
N.A.	4.5	5.2	6.7	6.9

7. 男子学生に目立つ友人・交友関係の薄さ

大学に入ってよかった点として圧倒的に多い回答は、本学学生においても私大連全体においても「友人を得たこと」である。しかし、その比率を比較すると、2006年、2010年とも本学学生のほうが私大連全体より7ポイント以上低い。しかも、本学の場合、回答率には男女間で大きな差があり、男子学生の回答率が低い。2006年では、女性77.1%に対して男性59.9%、2010年には女性77.3%に対して男性60.8%である。私大連全体においても男性より女性の回答率が高い傾向はみられるが、その差は7～8ポイントであり、本学における男女差は顕著である。

その原因は、本学男子学生が「友人を得たこと」をよかったとする回答率の低さであり、2006年、2010年とも私大連全体の男性より約10ポイント低い。

さらに、別のデータは、本学学生の友人・交友関係が、私大連全体と比べて、薄いものとなっていることをうかがわせる。

まず、「現在、自分のことを何でも話せる友人がいますか。1つだけ選んでください。」との質問への回答で、「いる」の比率が本学は私大連全体よりやや低い。2006年では私大連全体が81.7%に対して本学は77.9%、2010年には私大連全体が82.7%に対して本学は77.7%である。ちなみに、ここでも男女の差が大きく、2006年には約7ポイント(男性75.5%、女性82.3%)、2010年には約11ポイント(男性73.8%、女性85.0%)の開きがある。

また、悩みや不安を相談する相手をきいた質問では、私大連全体でも本学でも「友人」という回答が最も多いが、本学の比率は、2006年、2010年ともに、私大連全体より3ポイントほど低い。ここでも男女間の違いは大きく、2006年は男性68.4%に対して女性81.1%、2010年は男性64.3%に対して女性79.1%と、13～15ポイントの差がみられる。

こうしてみると、本学学生、特に男子学生には、信頼できる友人をもてないで大学生活を送っている者が多くいることがわかる。女性に比べて男性の交友関係が薄いという傾向は私大連全体でもみられるが、本学の男子学生においては、その傾向が顕著である。

8. 就職への強い不安と安定志向

本学学生にとって、就職への関心は私大連全体よりも強い。「大学生活の中で大切だと思っていることは何ですか。3つまで選んでください。」との質問に対して、私大連全体と比べて本学学生には「進級・卒業すること」という回答が多いことはすでに述べたが、同じ質問に対して「よい就職先を見つける」という回答が多いことも本学の特徴である。2006年には私大連全体が12.2%に対して本学は18.1%、2010年には私大連全体が16.2%に対して23.8%であり、6～7ポイント高い。

また、本学学生は就職に対する不安も強い。「就職について次のような不安を感じたことがありますか。2つまで選んでください。」への回答をみると、私大連全体と比べて本学学生に多いのは「就職すること自体」と「就職できるかどうか」という根本的な不安である。表12をみればわかるように、2006年、2010年とも前者については4ポイント、後者については7ポイントほど私大連全体より本学学生のほうが高い。

表12 「就職について不安なこと」(2つまで選択)

(単位%)

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
就職すること自体	22.5	27.3	24.9	29.1
就職できるかどうか	46.3	53.4	61.5	69.1
自分の適性にあった職業を選べるか	42.2	40.7	33.5	29.6
規則正しい生活ができるかどうか	5.0	4.3	4.6	3.5
社会人としてさまざま拘束を受けることに耐えられるかどうか	10.8	9.2	9.0	9.3
就職することによって、自分の生き方が貫けるかどうか	12.8	10.4	10.1	7.9
就職先で人間関係にうまくとけ込めるかどうか	15.6	16.2	14.2	15.2
大学院進学を希望するが、就職する時期が遅れる	4.2	2.9	3.6	1.8
女性と男性が対等に扱われるか	2.2	1.3	1.7	1.2
いつ頃から就職活動をしたらよいか	11.1	10.8	10.1	9.9
特に不安を感じたことはない	5.0	4.0	4.4	2.9
N.A.	1.1	1.9	1.3	2.1

さらに、希望する就職先についても、本学学生は私大連全体と比べて大きな特徴がある。第一に、「公務員」と「民間企業・団体」を希望する者が多く、それ以外の選択肢、特に「専門職」や「教育・研究職」といった専門性の高い進路希望者が少ないことである。「どのような進路を選択したいと考えていますか。2つまで選んでください。」の質問で、「公務員(国家、地方)」と「民間企業・団体」を合わせた回答率は、2006年、2010年とも私大連全体より8～12ポイント高い。

第二に、特に公務員志望者が多いことである。進路に関する上述の質問で「公務員(国家、地方)」との回答率は、2006年で37.2%、2010年で42.3%であり、私大連全体より2006年で11ポイント、2010年でも12ポイントほど高い。ちなみに、公務員志望率は、女性より男性に高く、学年では1・2年生に高い。

第三に、安定志向である。公務員志望者が多いこともその表れとみてよいだろうが、民間企業への就職希望者においても「安定性」が重視されている。表13は、民間企業・団体希望者に「どのような民間企業・団体に就職したいと思えますか。2つまで選んでください。」ときいた質問への結果であるが、「安定しているところ」を選ぶ比率は、2006年で私大連全体より11ポイント、2010年で9ポイント本学学生のほうが高い。

表13 「どのような民間企業・団体に就職したいか」(2つまで選択) (単位%)

	2006年		2010年	
	私大連	本学	私大連	本学
安定しているところ	47.9	59.2	56.9	66.4
給与の高いところ	24.9	27.5	22.5	26.0
規模の大きいところ	9.0	7.2	7.7	6.2
ベンチャービジネス	1.5	0.9	1.5	1.1
外資系	4.2	2.5	2.8	1.7
能力主義の徹底したところ	2.9	2.7	2.1	2.2
男女の待遇に差のないところ	5.5	4.6	4.9	4.0
社会貢献に熱心なところ	7.7	7.2	7.4	4.0
地域に根ざしたところ	8.1	13.4	9.1	16.5
全国展開しているところ	2.8	3.6	2.5	2.4
グローバルな事業展開をしているところ	9.2	5.6	9.9	5.9
イメージがよいところ	10.5	9.2	9.8	7.8
自分の能力を活かせるところ	38.1	32.2	34.2	29.1
大学で学んだことを活かせるところ	8.3	6.9	8.4	5.9
その他	6.1	4.4	6.0	5.0
N.A.	0.8	0.9	0.9	1.7

9. まとめと対策

以上みてきたところからわかるように、本学学生の学生生活には、見過ごせないいくつかの問題がある。最も重視すべきは、学生生活が充実していると感じていない学生が多いことである。そして、確かにそうであろうと思われる本学学生の特徴も明らかになった。授業への関心はもっぱら単位取得に限定され、大学での「学び」に関心がない。クラブ・サークル活動、ボランティア活動への参加が少なく、関心も低い。気のおけない友人と有意義な時間を過ごしているわけではない。就職への不安を抱えつつ、なかには長時間のアルバイトで忙しい者もいるが、ひまな時間をなんとなく過ごしている者も多い。一言でいえば、学生生活の「空洞化」である。もちろん、そうした学生ばかりではない。しかし、本学では、そうした学生が他大学と比べて有意に多いというのが、本稿の知見である。

そして、この知見は、われわれ大学教職員にも大きな問題を提起することになる。充実感の

ない学生生活は、学生自身にとって不幸であるだけでなく、本学にとっても大きな問題の原因となる。たとえば、充実した学生生活を送っていない学生が就職活動において大きなハンディキャップをもち、結果として大学の就職率を低下させることは十分に考えられるし、充実した学生生活を送っていない学生が目立つ大学が学生募集において大きなハンディキャップをもつことも十分に考えられる。

したがって、本学は、学生が充実した生活を送るために何が足りないのかについて考え、できるかぎりの対応をとる必要がある。これまで見たところによると、対応の柱は4つあるように思われる。第一は課外活動の活発化であり、第二は授業改善と授業外学習の促進であり、第三は学生がキャンパスに滞留できるための施設設備の充実であり、第四は初年次教育の充実である。

第一の課外活動の活性化のためには、特に停滞が著しい文化系のクラブ・サークル活動へのでこ入れ、そして東日本大震災を機に多くの学生が関心を示しているボランティア活動の組織化が重要なテーマとなろう。前者については、とりあえずは、クラブ・サークル活動の規制緩和や財政支援を急ぐべきであろうし、さらには、スポーツ推薦入試に対応するような文化活動推薦入試を導入するのも有効かもしれない。後者については、ボランティアセンターの設立と組織的運営の確立が急がれる。

第二の授業改善と授業外学習の促進は、まさに現在大学が進めているFD活動の中心課題である。授業内容に興味と関心を与え、自ら学習することを習慣化することで、単位取得のためだけでない「学び」を実感させることが重要である。もっとも、授業改善についても授業外学習についても、大学はそれをサポートする仕組みを整備していかなければならない。特に、授業外学習のサポート体制の整備は、早急に進めていかなければならない。

また、第一と第二の混合として、ゼミなどの少人数クラスを中心とした学習活動や課外活動の活発化があり、そのための仕組みづくりや財政支援も必要であろう。

以上の2つに比べると、第三にあげた、学生がキャンパスに滞留できるための施設設備の充実は、それ自体が学生生活の充実を直接的にもたらしものではない。そうした場所が、結局はひまな学生が時間をつぶす「たまり場」にしかならない可能性もある。しかし、学生の孤立化を防ぎ、自発的な活動を促すためには、こうした空間が必要なこともまた確かである。学生の要望を聞き、できるだけの対応をしていかなければならない。また、これと関連して、学生用ロッカーの整備も重要であろう。

もっとも、本学学生を取り巻く状況も考えるとき、こうした対応・努力がすぐに報われるとはかぎらない。本学学生は、私大連全体と比べると、「家計にとって学費は負担」と感じている比率が高く、奨学金を受けている割合も高いことからわかるように、経済的に決して豊かで

「学生生活実態調査」（2006年・2010年）にみられる本学学生の特徴

はない家庭出身者が多い。さらには、地域的にも豊かとはいえず、就職先も多くない。こうした環境では、「ともかく早く大学を卒業して、ともかくどこかに就職しなければ」という気持ちが強くなり、大学生活を楽しむ経済的・心理的余裕をもちにくくなるのは、仕方がないことであろう。実際、本学学生には入学時から、大学生活を卒業・就職のために消費すべき期間としてしか捉えられていない者が多い。

そうであればこそ、第四にあげた初年次教育が重要である。われわれは、一方では、学生のこうした気持ちを理解しながらも、しかし他方で、充実した大学生活を送ることの意義、大学での「学び」の意義を理解させなければならない。これがうまくいってはいじめて、学生生活の充実に向けた諸施策が意味をもってくる。その意味で、今回の調査結果は、本学がとるべき今後の初年次教育のあり方に、明確な方向性を示している。

参考文献

東北学院大学学生部（編）『東北学院大学第18回学生生活実態調査報告書（2006年10月調査実施）』（2007年）。

東北学院大学学生部（編）『東北学院大学第20回学生生活実態調査報告書（2010年10月調査実施）』（2011年）。

社団法人日本私立大学連盟学生委員会・学生生活実態調査分科会（編）『第12回学生生活実態調査集計報告書』（2007年）。

社団法人日本私立大学連盟学生委員会・学生生活実態調査分科会（編）『第13回学生生活実態調査集計報告書』（2011年）。